

与一記念弓道場

弓術文化に影響を与えた偉業

那須与一（1169-1232）は、屋島の戦い（1185）で一本の矢を放ち、その名を歴史に刻んだ。与一と源氏の軍は、本州と四国の間の海峡を越えて敵の平家軍を追った。しかし、平家は海軍と彼らが海上で保ことができる距離感に自信を持っていた。平家方の女性が小さな扇子を掲げ、追っ手の源氏方にそれを撃ち落としてみろと挑発した際、源氏は未だ浜辺に居た。与一は波間に馬を乗り入れ、狙いを定めて矢を放ち、一矢で扇を射って歴史に名を残した。彼はその武勇に報いられ、現在の井原市的一部分を含む5つの地域の地頭に任命された。

井原市には、弓にちなんだ地名や、与一の子孫が作った記念墓碑など、那須与一ゆかりの史跡がいくつもある。永祥寺はもともと那須家の菩提寺で、境内にある袖神稻荷神社には、与一が伝説の弓射をした際に破った袖が祀られている。

与一の弓の偉業は、井原市の人々、特に古代の弓術に基づく武道である弓道に励む人々に、今でも熱気を与えている。人口およそ37,000人のこの街に、弓道場は複数ある。また、井原市は、西日本最大級の弓道大会である那須与一を偲ぶ西日本弓道大会の開催地で、2024年には50回目となる年次大会が開催され、一部の催しでは扇の形をしたのが使用

されている。その大会は、弓道と与一自身の記念館である「井原市与一記念弓道場」で開催された。

弓道の伝統を受け継ぐ

井原の弓道愛好家にとって、与一は重要なシンボルである。1989年3月にオープンした与一記念弓道場の本館と射場は、与一とのつながりを維持し、弓道の発展に努める井原の姿勢を体現する場所である。

本館は井原運動公園内の樹木が茂った丘の上にあり、丘の中腹には3つの弓道場がある。

一つ目の射場は1972年に完成した井原で最初の公営弓道場であり、射距離28メートルで、一度に6人が射ることができる。二つ目は遠的用の射場で、射距離は60メートルある。一番上にある3つ目の射場は、記念館に直結した射距離28メートルの射場で、12人が同時に射ることができる。

与一記念弓道場には、与一の有名な弓射を描いた額や壁紙など、与一に関連する目を引く作品がある。また、地元のデニム産業との縁として、射撃場の上には井原デニムの暖簾がかかっており、会員は井原デニムの弓道着を着用している。

弓道場では競技会がほぼ毎月と練習会が週に数日、また定期的に季節ごとのイベントも開催されている。また、弓道経験者が弓道の感動を伝えるために行っている、初めて弓道に触れる人向けの体験教室も注目されている。

弓道を理解する

武道である弓道は、狩猟技術でありスポーツであるアーチェリーとは大きく異なる。弓道場で行われる規則立った所作の全てが、厳格な鍛錬である。その目的は単に正確に矢を射て的に当てるだけではなく、構え、呼吸、狙い、射という定まった動作の型をスムーズに行うことにある。

与一記念弓道場では、初心者向けの弓道体験教室を開催している。弓道場での作法や射法のデモンストレーションの後、参加者は個別に指導を受けながら、弓の構え方や的に向けた矢の射ち方を学んでいく。ほとんどの弓道場では、矢を射る前に基本をしっかりと基礎を学ぶ必要があるが、ここでは経験のない初心者でも矢を射る貴重な機会を得られる。予約と少額の参加料が必要で、指導は日本語で行われるが、日本語を話せない参加者でも身体を使っての実演と指導で基本的には十分である。このワークショップは、一人から大人数のグループまで、参加できる。